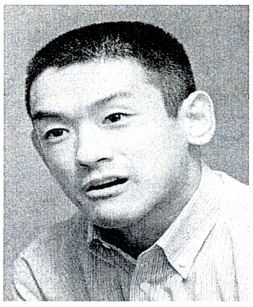
7　オピニオン　14版　令和元年（2019年）5月8日　水曜日　産経新聞

令和27年―戦後100年への旅

正論



東洋学園大学教授
櫻田　淳

令和の御代が幕を開けた。安倍晋三首相は、令和元号発表に際しての談話の中で、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味を説明した。

振り返れば、タイ、サウジアラビア両国大使を歴任し、退官後には外交史研究と外交評論の両面で活躍した故・岡崎久彦氏は、著書『百年の遺産』中、次のように書いている。

「文化の最盛期というのは、古今東西の歴史で、戦乱の百年後に訪れています。漢の武帝、唐の玄宗の時代、日本の元禄等、皆そうです。…関ケ原の戦い（1600年）の50年後といえば、由井正雪の乱（1651年）です。関係者は皆、関ケ原戦後生まれですが、まだ戦争の長い影をひきずっています。戦乱の影響のかけらもない、井原西鶴、近松門左衛門、尾形光琳、松尾芭蕉、関孝和など元禄をになう世代が生まれるのは、1640、50年代です」

「ベル・エポック」も

確かに、欧州史をひもといてみても、19世紀末から20世紀初頭に掛けての「ベル・エポック」と呼ばれた時代は、欧州全域がフランス革命とナポレオン戦争の衝撃に揺れた時代からおよそ100年後である。それ故にこそ、14年前、平成17年9月、戦後60年を迎えた折に、筆者は、この岡崎大使の記述を受けて、本欄に次のように書いたことがある。

「岡崎氏の記述に従えば、我が国の文化の最盛期は、四十年後、『戦後百年』の二〇四五年前後に訪れる。そして、その時期に元禄期の井原、近松、尾形のような働きをするのは、現在の子供たちである。…ただし、その前提は、今後の我が国が対外政策上の舵取りを誤ることなく、現在の経済上の実力や社会の活力を維持していくことである」

その後、平成の後半15年の歳月の中で、日本は、「100年に1度の経済危機」と評されたリーマン・ショック後の経済混乱、そして「千年に1度の震災」と評された東日本大震災を経た。そして、日本は、「世界第2の経済大国」と呼ばれた地位も中国に譲った。

世界最高の「自由度」

令和の御代は、その終盤期に「戦後百年」の節目を迎えることになるのであろう。岡崎大使が書いたように、それぞれの国々の「文化の最盛期」が「戦後百年」に重なるのであれば、それに向けて何を手掛けるかが、令和の御代を生きる人々に問われることになろう。

第一に、高坂正堯教授が「米国とは仲良く、中国とは喧嘩せず」という言葉で示した対外政策方針を徹底させることである。これは、単なる福澤諭吉以来の「脱亜入欧論」の焼き直しではない。国際NGO団体「フリーダム・ハウス」が発行する『世界における自由　2019年』の「自由度」指標によれば、日米豪3カ国や西欧・北欧諸国が100点満点中、80点以上の高値を付けているのに対して、中国が付けている値は11点である。

日本にとっては、既に経済隆盛を遂げた中国との不用意な確執は避けるべきであるけれども、それでも対中関係が米豪両国や西欧諸国との関係を超える重要性を持つことはない。

明治以降、日本が成就したものが「豊かな社会」だけではなく「自由な社会」の実現にあるならば、「自由」の価値に対する姿勢が対外関係に際しての距離の取り方に反映されたとしても、それは自然なことである。

平成は永き助走期間

第二に、日本国内でも人々の「自由な活動」を萎縮させない法制度上の仕組みや社会での合意は、多様に築いておく必要がある。平成の御代には、昭和の御代に比べれば遙かに、若い世代の人々が自然に世界に向き合うようになった。また、今春、東京大学と早稲田大学に視覚障害がある女子学生が入学したと報じられた挿話は、障害を持つ人々にとって、教育に絡む「自由」の環境が平成の歳月の中で劇的に整えられたことを示す。これもまた、平成の御代の日本が実現した「自由」の成果の一例であろう。

前に触れた「自由度」指標では、日本が付けた値は96であり、それは米国の86はおろか、ドイツの94、英国の93、フランスの90をも上回っているのである。こうした世界最高水準の「自由度」こそ、当代日本の「矜持」のよりどころであり、「戦後百年」に向けた日本の人々の歩みを支えるものであろう。

平成の御代は、とかく、「バブル崩壊」以後の経済情勢を指して、「喪失と停滞」の歳月として一般に語られてきた。しかし、本稿で述べてきたように、令和の御代が、その終わり頃に「文化の最盛期」を迎えることができれば、平成の御代もまた、それに向けた永き「助走期間」の歳月として後世、語られるようになるであろう。全ては、今後四半世紀、日本の人々が内外の「自由」の価値を守りつつ、その上に立って何を手掛けるかということ次第なのであろう。

（さくらだ　じゅん）

2019. 5. 8

東洋学園大学　www.tyg.jp　※無断転載、複製はご遠慮ください